

# 人権フォーラム2019in合志市



「ハンセン病問題を学びなおして」と題して学習成果を発表する江副心さん(熊本大学4年生)

平成31年2月2日(土)午後1時45分から、ヴィーブル文化ホールで、ハンセン病問題啓発事業として、「人権フォーラム2019in合志市」を開催しました。(参加者約450名)

オープニングでは、合志中学校合唱部の生徒さんが透明感のある美しい声で「スマイルアゲイン」と菊池恵楓園を題材とした「希望の鐘」を歌い、参加者を魅了しました。その後、開会行事に続いて二人の方がハンセン病問題についての学習成果を発表しました。

最初は「ハンセン病問題を学びなおして」と題して、江副心さん(熊本大学4年生)が、「ハンセン病のことを正しく知り、回復者の方の思いや生きる姿を知って、そこから何を考え、どう生活に活かしていくのが大切である。ハンセン病問題から学んだことが心の中にあれば、あらゆることに繋がっていくのではないかと。『共に生きる』ことにつながる、よりよい社会づくりが、ここ合志市から広まっていくことを願っている。」と発表しました。

次に、「世代を超えて」と題して、西本匡伽さん(合志中学校2年生)が、「自分の祖母の父が恵楓園の職員という関係で、小1から23歳まで恵楓園に住んでいた祖母から、ハンセン病のことや恵楓園内の患者さんたちの生活などの話を聞くことができた。その話と小学生のときから学び続けているハンセン病問題学習を重ねながら、ハンセン病問題などの差別問題は、自分と深く関係のある身近なものであると考えることが大切であること、世代を超えて自分も正しくハンセン病問題や恵楓園のことを学び、差別や偏見を少しでもなくしていきたい。」と発表しました。



「世代を超えて」と題して学習成果を発表する西本匡伽さん(合志中学校2年生)



美しい歌声で「希望の鐘」などを披露した合志中学校合唱部のみなさん



ハンセン病回復者の方のブロンズ製の手(菊池恵楓園から借用)に触れるコーナーです



市内小中学校の児童生徒のみなさんが、これまで学んできたハンセン病問題の学習成果や菊池恵楓園からお借りしたパネルなどを展示しました

## 「光の扉を開けて」

後半は、HIV人権ネットワーク沖縄のみなさんによる演劇『光の扉を開けて』を上演しました。本作品はハンセン病回復者の方々から聞きとった実話をもとに創作され、2004年の初演以来、全国で公演を続けています。

HIVに感染した高校生めくは社会の偏見を恐れ、誰にも言えず深く悩み、友達の何気ない差別・偏見に満ちた言葉に深く傷ついていきます。そんな中、ハンセン病回復者の八重子おばあと出会い、おばあが語る想像を絶する過去、人権侵害に言葉を失います。壮絶な体験をしたにもかかわらず、明るく生きているおばあ姿に、めくは生きる勇気をもらいます。

中高生を中心とした沖縄の子どもたちの迫真の演技に、会場全体が深い感動に包まれ、あちらこちらで涙する参加者の姿がありました。



「らい予防法」違憲国家賠償請求訴訟の法廷で証言するハンセン病回復者の八重子おばあ



八重子おばあが、これまでの人生をふり振り返り、つらく悲しい思い出を語る...



ハンセン病の子どもたちを分けへだてなく接した教師(八重子おばあのおい出)

### 参加者の感想

● 私は8年間、人権学習をしてきましたが、ここまで内容がわかりやすく、心に響き感動したことはなかったと思います。(10代)

● とても感動して涙がとまりました。同じあやまちをくり返さないよう、このような学びがくり返し必要だと思います。(40代)

● 今日参加できて本当によかったです。私もあなた方の仲間に入れてください。共にがんばっていきましょう!ありがとうございました。(50代)

## ハンセン病問題の解決の促進に関する法律(ハンセン病問題基本法)

(平成21年4月施行)

第3条 何人も、ハンセン病の患者であった者等に対して、ハンセン病の患者であったこと又はハンセン病に罹患していることを理由として、差別することその他の権利利益を侵害する行為をしてはならない。